

視 点

或る感想

玉井敬之

今春（一九七八年）、本学の入学試験で、現代国語の出題の一つに長塚節『土』からがあった。

この時すべての樹木やそれから冬季の間にはぐったりと地についていたすべての雑草が爪立てして、ただ空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつとひき止めて放さない。それでいっさいの草木は土と直角の度を保っている、冬季の間は土と平行することを好んでいた人も鉄の針が磁石に吸われるごとく土に直立して各自に手に農具を執る、紺の股引を藁でくくって皆田を耕し始める、水が欲しいと人が思う時蛙は一斉に裂けるかと思うほど喉の袋をポウチョウさせて身をゆるがしながら殊更に鳴き立てる。

出題文は『土』の「六」から抜き出されたもので、読みやすいうようにいくつかの漢字は新字体または平仮名に改められ、句読点も多く補われている。

ここでは、出題文の最初の部分を引用したが、設問の一つに「土と平行する」ということの意味を句読点とも二十字以内で求めたのがあった。たまたま、その採点を私がすることにたが、解答用紙のその部分を読んでいるうちに、次第にやりきれない気持ちになっていったのである。

いま、そのときのことを思い出しているが、私の印象では、受験生のうち七〇パーセントくらいが、ほぼ次のような解答をしていた、と記憶している。

。部屋を暖かくして休養する。

。家で昼寝をしている。

。暖かい部屋でテレビや新聞をみている。

まだいくつかこれに似た解答があったが、列挙しても仕方がないだろう。入学試験や入社試験の解答に、珍答迷答が新聞や週刊紙で紹介されて、思わず苦笑させられてしまうことがよくあるが、それも正解または予想される解答の束のなから、ときたま、突飛な、奇抜なものがあるからこそ、珍答とも迷答ともいうことができるのである。しかし、今度のような場合は、いったい、どういったらいいのだろうか。

私たちの周囲には、『土』にえがかれたような貧農の姿を、もう見ることはできないのかも知れない。農村の構造は、高度

成長経済政策のおかげで、一九六〇年代から、急激に変化したようだ。おそらく、『土』の舞台となった茨城県結城郡の鬼努川畔においても事情は同じであろう。むしろ、東京に近いだけに都市化の波は、もっと荒々しいものがあるだろう。

『土』は、出題文のところだけをみて、季節の推移が擬人法や擬態語を豊富に使ってえがかれており、夏目漱石がいうように、その「自然の描写」は、きわめて「独特」であることが理解されると思う。しかし、そのなかにも、農民の激しい労働の姿はえがかれていた。「ジュクスイ(3)することによって、百姓は皆短い時間に肉体の消耗を回復する」と書かれているが、むしろ、ここからは農民の厳しい労働の有様がうかがわれるのであって、草木や蛙と同様に土にへばりつき、自然に隷属して生きていかなければならなかった農民の姿にこそ、目を注がなければならぬ。『土』での自然の擬人化は、貧しい農民の姿と深くかかわっている。

私たちの周囲は、本当に貧困というようなことがなくなったのだろうか。もう問題にはならないのだろうか。かりに出題文の内容と設問の意味が十分に理解できなかったとしても、出題文にも出典が示されていたから、この作品が、どのような農民をえがいているかは、高校卒程度の受験生であれば、普通の

文学史的常識で、十分に理解できたはずである。だから前記のような解答は、やはりおかしいのである。まして、『土』が書かれた時代にはテレビはなかった。

文学作品を「読む」ためには、正確な読解が要求されることはいうまでもない。正確な読解への努力が、作品の世界に共感するための、まず第一の条件でもある。しかし『土』の世界に共感することは、もはや、不可能なのだろうか。それほど、私たちは豊かな時代に生きているのだろうか。今度の経験で、私たちと『土』の世界との間に、深い断絶を感じるが、豊かになったこととひきかえに、何か大切なものを失ったということはないのだろうか。

『土』が単行本になったとき、夏目漱石が長い序文を書いている。大変有名な序文だが、今ではあまり評判がよくない。友人の井上俊夫も『農民文学論』（五月書房、一九七五年六月）で厳しい批判をしている。私は井上俊夫の批判を認める。そのうえでなお、「面白いから読めというのではない。苦しいから読めというのだと告げたいと思っっている」と書いたことを、もう一度思い出し、よく噛みしめてみたいのである。

受験生も、この作品を読んでいたなら、前記のような解答を書くようなことはなかっただろう。ただ、今のよう激しい受

驗戦争のさなかに、この全くといっていいほど面白くない読みづらい小説を、読めというほうが無理なのかも知れない。しかし、それでも私は、「読み苦しいのを我慢して、この『土』を読む勇氣を鼓舞すること」を漱石とともに「希望」する者なのだ。せめて、『土』が、どんな小説であるかくらいの知識は、どうしても持つていてほしいと思う。今春の本学の受験生のなかには、『土』についての知識が、すっぽりと脱け落ちていたと思う。

この機会に私は日本近代文学にえがかれた貧しい人びとの姿について考えてみたい。日本の近代文学の或る部分は、貧困とたたかいて敗北の歴史であったと思う。貧しい人々がえがかれただけでなく、貧困に傷つき倒れた文学者も多くいた。そういう私たちのまえによこたわっている近代の文学と文学者について、これから、しばらく考えてみたいと思っている。

土橋寛教授古稀記念論集刊行予告

土橋寛編『日本古代論』(笠間書院刊)

本学の土橋寛教授(明治四十二年二月二十七日生)は、めでたく古稀の年を迎えられました。ここにそれを記念して京都大学上田正昭教授、本学南波浩教授の呼びかけにより古稀記念論集を編纂することになりました。本学関係以外に御執筆いただける予定の方々は次の通りであります。

(昭和五十四年六月末刊行予定)

伊藤 博	曾倉 岑
井村 哲夫	直木 孝次郎
大久保 正	芳賀 紀夫
岡田 精司	松前 健
神野志 隆光	益田 勝実
阪下 圭八	吉井 巖
杉浦 明平	
杉山 康彦	